



第4期ボランティア養成講座

当センターは、自死にまつわる課題に関わることにより、苦悩を抱えている時であっても居場所のある〈ひとりぼっちにならない社会〉の実現を目指して活動しています。具体的には、死にたいほど苦悩を抱える方へむけた〈電話相談窓口の開設〉、大切な人を自死で亡くした方へむけた〈語りあう会の開催〉、すべての方へむけた〈シンポジウムや街頭活動の開催〉を行なっています。

それらの活動はボランティアによって支えられています。ボランティアとして活動していただくためには、当センターの活動理念を共有する必要があります。そのために、毎年講座を開催し、ボランティアを養成してきました。

2013年度も第4期養成講座の受講生を募集しています。講座は5月から7月まで全10回開催し、実践的な支援方法について学びます。当センターの活動理念に共感し、活動を共にする新たな仲間が増えることを期待しています。

(N.Y)

募集中!

第4期ボランティア養成講座

- ◆募集期間 4月22日(月) 必着
- ◆受講料 2万円
- ◆募集定員 25名程度
- ◆実施期間 5月9日～7月18日【全10回毎週木曜日】
2日間連続の終日研修があります

※詳細は別紙募集要項をご覧ください

被災地ノート①⑥

言葉の向こう



仮設住宅のお部屋を戸別にまわらせてもらっていて、よく聞かれる言葉に、

「私だけが辛いんじゃないから」

「みんな大変だから」

という言葉がある。

ひとしきり、ご自身の現状やお気持ちを話されたあとに、この言葉が続く。

この言葉のあとには、さらにどんな言葉が続くのだろう。

「だから辛いなんて言えない」

「だから大変なんて言っていない」

ということだろうか。しかし、ほんとうに訴えたい気持ちは、その言葉の向こう側にあるような気がしている。

あるお部屋に訪問したとき、訪問する直前にフラッシュバックを起こされていた方がいらした。何度も、「来てくれたのにごめんね」と私たちのことを気遣いつつ、

「なんだか、震災ぶりっこみたいでしょ」

と言われた。「震災ぶりっこ」という言葉でご自身のことを表現されているのだ。フラッシュバックを起こして、辛い思いをされているのに、「震災ぶりっこ」という言葉で、ご自分の気持ちを抑え込もう、抑え込もうとされているようにも思われた。

「私だけが辛いんじゃないから」

「みんな大変だから」

という言葉の向こうには、きっと「ひとりぼっち」になっている気持があるのではないかと感じる。

その人の悲しみは、その人のように悲しまれていいはずなのに。

その人の辛さ、大変さは、その人だけのものなのに。

だから、そこで話を切り上げることをせず、もう少しだけ、その方にご一緒したいと思う。

ほんとうに訴えたい気持ちが抑え込まれることで、悲しい気持ち、つらい気持ちが「ひとりぼっち」になっていないかどうか気がかりだからである。

(ボランティア2期生 A.C.)

『紅葉街駅前自殺センター』

光本正記著（新潮社）



本屋さんの新刊コーナーを何気なく見回していると、ひとつのタイトルが目飛び込んできた。『紅葉街駅前自殺センター』。京都自死・自殺相談センターと少し似ている。しかし印象は大きく違う。「相談」「予防」などの文字があってもよさそうだが、それらはない。正直、それほど興味はそそられなかったが、帯にある「生と死の意味を問う極限の人間ドラマ」というフレーズに後押しされて、読んでみることにした。「生と死の意味」、こうしたことは明確に定義することは難しい。しかし、本書を読んで、それを考えるきっかけは与えられたように思う。ぼんやりと頭に浮かぶものはあるが、文章化するのにはためらいがある。ともあれ、読後感としては、読み物としては秀逸であると思う。読んでいる最中の気持ちはどうだったかということ、とにかくせつない。

本書の世界では、みずから死を選ぶ際には、「自殺センター」の面談を経て、認可を得なければならない。仮にセンターの許可を得ないで、自死すると、周囲の人が罰せられるという設定である。それを理由にセンターに足を運ぶ人も多いようで、面談をする中で、自死を思いとどまった人も多いというが、この施策の是非は、ここでは問わないでおきたい。あくまでも小説の世界だ。この面談の中での主人公と担当官のやりとりは興味深く読むことができた。ひとつの言葉が発せられるまで、主人公の心の揺らぎが巧みに描写されている。

物語が進むにつれて、主人公の経緯や動機が明かされていく。様々に気持ちが揺れ動くが、死を決めた気持ちは揺らぐことはない。担当官の「自殺なんてやめればいいのに」という言葉も主人公にとっては無意味な言葉にすぎなかった。「あなたを救う」という人物が現れる。しかし主人公はこう答える。「僕が求めている救いは、生きることじゃない。誰かと話すことでもない。死によって救われる人生だってあるんです」と。主人公は大きな罪悪感を抱え、みずからを責め続け、あまりにも苦しすぎる人生を送っているのだ。

クライマックスは、いくつかの謎が明らかになり、物語が急速に展開していき、読み応えがある。思わぬかたちで、別れた妻の気持ちを知ることになる。ここは非常にグッと来た。そして、主人公にはこれまでに出来なかった感情が湧き起こる。

最後まで飽きることなく、読ませる小説である。

(T.Y.)

今月のことば

さいさいねんねん
歳々年々

ひとおなじからず
人不同

ときどき刻々と、人は変化していく。

(石井ゆかり文『禅語』ピエ・ブックス)

活動報告

- 2月期電話相談件数…148件（無言14件、よりそいホットライン31担当件を含む）
- 相談活動委員会
グループ研修 2月4日（月）3名、2月21日（木）7名
- 広報・発信委員会
委員会会議 2月14日（木）6名
- グリーフサポート委員会
語りあう会 2月14日（木）9名（参加者2名）



寄付ご協力一覧（敬称略・順不同）2013年2月1日～2月28日

浄土真宗本願寺派

株式会社エクザム

葛野洋明

森田眞照

中平了悟

竹本了悟

佐藤雄作

山本としこ

街頭活動にご協力いただいた皆様

ご協力にこころより感謝いたします

●支援方法

賛助会員 年間1口3,000円

寄付 金額は問いません

法人会員 年間1口10,000円

●会費・寄付金振り込み先

郵便振替 ゆうちょ銀行[振替口座] 00950-0-271875

他行間 ゆうちょ銀行[当座] ^{ゼロキョウキョウ}〇九九店 0271875

Sotto コメント

京都もやっと暖かくなってきました。暖かくなるのはうれしいですが、季節の変わり目のこの時期。独特のしんどさを感じておられる方も多いのではないのでしょうか。どうかお大事になさってください。Sottoでは、3月31日のシンポジウムの準備におられる日々です。ぜひ皆さまお越しくださいね！（N.Y.）

発行 2013年3月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局

〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町 92

T E L 075-365-1600

U R L <http://www.kyoto-jsc.jp>

E-mail so-dan@kyoto-jsc.jp